

## ●安藤仲太郎氏逝く

▼洋畫界の先驅者

▽黒田清輝氏談

安藤仲太郎君とは明治二十年以來の莫逆の友であつた。洋畫家の仲間では年長者の一人でもあり且又我國に於ける極めて初期の洋畫を明治初年の洋畫との仲繼者として日本洋畫界に在つては永遠に忘るべからざる一人である。幼年の時分から畫筆を弄そぶ事が好きで、十五六歳の頃には其の伯父に當る洋畫家高橋由一氏の畫塾天繪舎に入り、専ら肖像畫の研鑽に耽つた。高橋と云ふ人は英人ワグマンと工部大學の御備教師をしてゐた伊太利人の畫風を折衷したやうな繪を描いてゐたので君も亦その衣鉢を傳へて所謂英のアカデミー派の繪を得意としてゐた。君が洋畫界に雄飛したのは明治二十七八年頃から三十二年頃までの極めて僅な間ではあつたが然し君が我が洋畫界に貢獻したものは頗る大であつた。白馬會の創立當時の如き殆んど寢食を忘れて同志の間を奔走し、同會の起つたのは全く君の賜であると云つても敢て誇大の言説ではなからう、尙ほ此他世間に知られぬ事柄で君の努力に俟つたものが頗る多い。京都で催された第四回内國勸業博覽會には審査員に擧げられ、其の鑑賞態度の明快にして一片私心を挟さまざる審査振は等しく出品者の満足する處であつた。代表作として傳ふ可きは一番に肖像畫で、現に貴族院にある「伊藤公の立像」と西本願寺の「大谷前法主の實大の座像」「鳩山博士の立像」等である、絶筆は昨年渡鮮して描いた「李王殿下の肖像」で漸く此程完成したばかり、君自身には未だ不満足の點があるとして加筆中であつたが未だ送致せぬ中彼の世の人となつた。元來蒲柳の質であつた君は昨秋朝鮮漫遊中、重い神經衰弱

に罹り歸來鬱々として非常に世を疎んじ、今夏來益々激しく、昨十日午後散策中俄かに腦溢血にて再び立つ能はざるに至つたのは誠に痛惜に堪へぬ、せめても李王の肖像を完成させ満足的笑を見た上で瞑目させたかつた。

〔『読売新聞』大正元年二月二日〕

安藤仲太郎（一八六一～一九二二年）は高橋由一の甥で、画技を由一に学んだ。白馬会の結成に当たっては、その創設に大きく関わったことが「蹄の痕（一）」（本書一九五～二二頁）に収録された黒田と安藤の往復書簡からうかがえる。後年、小杉未醒は「遠方より見てあたる黒田氏の事業」（『アトリエ』一七 大正三年九月）で、安藤について「今は死んだが、安藤仲太郎と云ふ洋画家があつて、是が私の師匠の故五百城文哉と旧友で、黒田氏が仏国より帰り、新派の旗を立てるや、直ちに共鳴して、画風も一転し、朱や橙黄を紫に交織した風景などを作つた」と記している。安藤仲太郎については、酒井忠康「安藤仲太郎日本の寺の内部」（『國華』二二八〇 平成十四年六月）を参照。